

Title	ジェンダーの視点からみたスポーツ：「ジェンダーとスポーツ」の授業実践を通して
Author(s)	梅津, 迪子
Citation	聖学院大学論叢, 14(2): 33-54
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=202
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ジェンダーの視点からみたスポーツ

——「ジェンダーとスポーツ」の授業実践を通して——

梅 津 迪 子

How Do Students Perceive Sports from the Viewpoint of Gender?

——A Case Study of a "Gender and Sports" Class——

Michiko UMETSU

The purpose of this article is to clarify how students perceive sports from a new point of view. Lectures dealing with "gender and sports" were organized to facilitate student understanding of the issue of gender in sports. This study examines the issue of gender, the design of instruction, and the final product. Almost no students had ever heard the term "gender." However, through a series of lectures, they came to understand the gender aspects of sports. They also perceived "gender bias" lurking in human relationships (friends or parents) and social life. This was a jolting experience for the students, but it provided them with new perspectives for understanding society.

I. 緒 言

『小さなうたがい』

あたしひとりが叱られた／女のくせになってしかられた。

兄さんばっかしほんの子で／あたしはどっかの親なし子。

ほんのおうちはどこかしら。

『女の子』

女の子って／ものは／木のほりしない／もののなのよ。

竹馬乗ったら／おてんばで／打ち独楽するのは／お馬鹿なの。

私はこいだけ／知ってるの／だって一ぺんずつ／叱られたから。

金子みすず⁽¹⁾

Key words; Gender, Sports, Class Practices

1903年生まれの金子は、その時代に想定された「普通の女性」観に依拠する個々の事柄と、そこに潜在する理不尽さを「ことば」と「文字」に残し、26歳の若さで自らの命を絶っている。あれから一世紀も経過しようというのに、文字に残された「主題」は現存しているし継続されている。

1945年の国連憲章を機に、「今世紀最大の差別」として位置づけられた女性差別の解消をめざす機運が高まり、1979年に「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」が採択された。1970年代から1980年代にかけてさまざまな領域でジェンダーの視点での見直しが始まったといえる。

教育現場では「家庭科」の男女共修運動が盛んとなり、1989年の文部省学習指導要領の改定で「家庭科の男女共修」と「体育の男女平等カリキュラム」が導入された。しかし、10年経過したにもかかわらず学校体育の教育実践現場では男女別のカリキュラムが大勢を占めている⁽²⁾。

一方、わが国の「一向に進まない」状況をよそに、スポーツに関わる国際的な動向は、大いなる発展を見せている。

その筆頭は、1994年に英国のブライトンで開催された、第1回世界女性スポーツ会議である。この会議はIOC（国際オリンピック委員会）が支援する形で開催され、82ヶ国280名の世界のスポーツに関する女性リーダーたちが一堂に会した。この会議では、「女性、スポーツ、そして変革の挑戦」がメインテーマに掲げられ、スポーツのあらゆる面において女性がかかわることを可能にし、尊重するような文化の発展について論議された。「変革」という言葉には、現代社会において女性がおこなう様々な不平等に直面していること、そしてこれを是正するためのプロセスを加速させることが急務であること、との思いが凝集されているように感じられる。会議は「ブライトン宣言」⁽³⁾を発して幕を閉じることとなった。この宣言は、社会とスポーツにおける公正と平等、施設整備、女性のスポーツ参加促進等の10項目の原則で成立しており、200以上の国際的・国内的組織が署名した⁽⁴⁾（この時点で日本は署名していない）。

このような流れに素早い反応を見せたのは、アメリカのNAGWS（全国女性スポーツ連盟）であった。NAGWSでは、ブライトン宣言の内容を具体化した「体育・スポーツを通じた男女公平」⁽⁵⁾というガイドブックを1995年に出版している。それは、体育・スポーツに存在するステレオタイプのな男女観や偏見に気づかせ、これらの解消に向けて基本的知識を提供することを目的とするものであった。

ブライトン宣言の翌年、1995年に北京で開催された国連第4回世界女性会議では、これまでの諸問題に加え新たな課題がクローズアップされた。それは女性に対する暴力の撤廃（セクシュアル・ハラスメント、ドメスティック・バイオレンス）やリプロダクツ・ヘルス・ライツの問題である。また、最終決議文には「スポーツおよび身体活動に関した3項目を「活動のための行動綱領（Platform for Action）」に盛り込むことに成功した。

さらに、1998年には「ウインドホーク行動要請（The Windhoek Call for Action）」を決議した第2回世界女性スポーツ会議が開催された。この会議で決議された内容は、ジェンダー・フリーをはじ

めとする9つの項目である。特に、スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメントの問題が取り上げられたことや、民族・宗教等の社会的文化的背景の違いによって多様な「女性」が存在することが確認されたことが注目される。また、2000年にはIOC第2回女性スポーツ会議が開催され、「女性スポーツの要求にどの程度答えているかをオリンピック候補地選定の一つの評価基準とする」という項目が盛り込まれた。

IOCの方針に対応して、わが国でも、2008年のオリンピック候補地に名乗りを上げていた大阪市において、第1回アジア女性スポーツ会議（2001年6月、筆者も出席）が開催された。その席で、日本オリンピック委員会（JOC）はようやく「ブライトン宣言」に署名することとなった。しかし、そこには、「アジアにおける最初の会議」や「ブライトン宣言への署名」といった「重要なイベント」によって、オリンピック候補地をアピールしようという政治的な思惑が見え隠れする。IOCが2005年末までに各国の女性役員の比率を20%以上に引き上げることを決定したにもかかわらず、わが国のJOC理事22名中女性は一人名だけという状態であることをみても、当の会議や署名が必ずしも「女性スポーツの問題」として定位されてはいないことが窺われる。

このように、世界の潮流はあらゆる領域においてジェンダー・フリーな社会を目指している。しかしながら、日本では、体育・スポーツ界におけるジェンダー問題に対する認識の薄さは、女性選手の競技力向上と反比例するかのように、国際的にみても際立っているといわれている⁽⁶⁾。スポーツを言説化するマスメディアや、体育・スポーツを専門とする（選手とコーチ・監督、競技者自身等）組織において、男女を問わず、ジェンダーの問題、あるいはジェンダーという言葉さえも、ほとんど話題に上らない。1997年には、体育・スポーツ界で「スポーツとジェンダー」特集⁽⁷⁾の発刊をみるが、「ブライトン宣言」の内容を知る人はまだまだ少数派に過ぎない。今日盛り上がりを見せる男女共同参画社会の流れを踏まえると、スポーツの領域に内包されている諸問題（教科書、メディア、体罰、権力構造のセクハラ等）にジェンダーの視点から検討を加えることは、きわめて重要かつ緊急性の高い課題であるといえる。では、現実の授業実践において、この課題にどのように迫ればよいのだろうか。

そこで本稿では、大学生に「ジェンダーの視点からみたスポーツ問題」を理解させるための授業実践を取り上げ、授業のデザイン、成果、課題について検証する。

Ⅱ. 研究方法

S大学で開講された総合科目「ジェンダーとスポーツ」の受講生53名（男子40名、女子13名）を対象に、2001年4月および7月に、質問紙による調査を行った。この授業は2001年度に新規に設定されたものであり、授業者（筆者）にとっても初めての試みであった。そのため、佐藤⁽⁸⁾が提唱する「反省的授業」の手法を採用した。反省的授業においては、授業実践過程を通して教材やプログ

ラムが再構築され、教師自身の抱いている認識も修正され発展していくという。

Ⅲ. 結 果

1. ジェンダーに関する知識

ジェンダーは「文化や社会によって形成された性別」を指し、生物学的性別を意味するセックス (sex) とは区別される。ジェンダーの形成は、家庭での夫婦の男女のあり方が子どもに再生産されたり、学校で教師自身のなかにあるジェンダー・バイアス (両性の生き方を不自由にしているような文化的側面、性別にともなうステレオタイプ、価値観、態度) が見えないカリキュラム (hidden curriculum) となって生徒たちに伝達されることが要因となるという^{(9),(10),(11)}。ジェンダーという語は1991年広辞苑に収録され、また、1995年の第4回北京世界女性会議をきっかけに一般の新聞の用語として使用され始めている⁽¹²⁾。

ところで、ジェンダーという用語は、ドイツ語ではゲーヌス (Genus) と表記される。これはGeschlecht (性) とGattung (類) を一つにまとめた概念 (genderはgeneralに通じる) である。このことを踏まえれば、ジェンダーをセックスとは異なる次元の、人間存在の根元的カテゴリーとして捉えるべきであると考えられる⁽¹³⁾。特に、身体性が重要な問題となるスポーツの世界においては、人間存在という視点が大きな意味をもつことになるだろう。

以上のことを念頭に置き、第1回の講義開始前に、ジェンダーに関する学生の知識の程度について把握するための予備調査を実施した。調査項目は、東京女性財団の「ジェンダー・フリーな教育のために—女性問題研修プログラム開発報告書—」の一部を適用した^(注)。なお、本調査ではサンプルの男女数に偏りがあるため、変数でなくジェンダーに関する意識の傾向をみていくことにする。

表1 ジェンダーという言葉

	聞いたことがある	聞いたことがない
女 子	5 (9.4%)	8 (15.1%)
男 子	8 (15.1%)	32 (60.4%)
総 数	13 (24.5%)	40 (75.5%)

(n = 53)

1) 「ジェンダーという言葉を知っていますか」

全体の約 1/4 (24.5%) の学生は「聞いたことがある」と答え、3/4 (75.5%) は「聞いたことがない」と回答した。しかし、「聞いたことがある」者も、記述欄には無記入であった。

ジェンダーの視点からみたスポーツ

2) 「ジェンダー・バイアスという言葉を知っていますか」

全員が「ない」と回答した。ジェンダー・バイアスとは、性別に関するステレオタイプや偏見に基づき、男性らしさ、女性らしさ、～のようなもの、といった思い込みを指す言葉として理解されている。それは、当該社会で伝統的に継承されている文化の一部であるともいえる。ジェンダー・バイアスは、幼児期からの成長過程で、家庭、学校、社会の組織に組み込まれ、個々人の心の奥深く、習慣や態度、価値観として共有されていく。

3) ジェンダー・バイアス度

男女の特性に関する「あなたの見方」を、ジェンダー・バイアスチェックリスト項目にしたがい、それぞれについて5段階で「男性の特徴か、女性の特徴か」を判断させ、性別に関するステレオタイプな見方の度合いを測定した。尺度は男性の特徴から女性の特徴まで5段階に分かれており、絶対男性の特徴・・・1, どちらかと言えば男性の特徴・・・2, 同じ・・・3, どちらかと言えば女性の特徴・・・4 絶対女性の特徴・・・5段階、となっている。採点は「ステレオタイプ」に合致すれば2点、それ以外は1点とし、採点方法も同じ方法を用いた（質問紙は男女の特徴としているが、実際はジェンダー・バイアス度のチェック項目である）。

12～13点の人…自由で、おおらかで、子ども一人ひとりと向き合える方

14～15点の人…かなりフリーでいい線いってます

16～18点の人…男子・女子でなく、一人ひとりの子の素顔をみつめよう

19～21点の人…残念ながらかなりのジェンダーバイアスの持ち主

22～24点の人…一人ひとりの子どもが「自分」を持っていることに気づいてください。もうすこし、頭をやわらかに。

表2 ジェンダー・バイアス度

女子のバイアス度	男子のバイアス度
—	12～13点 4 (10.0%)
—	14～15点 9 (22.5%)
16～18点 8 (61.8%)	16～18点 18 (45.0%)
19～21点 4 (30.7%)	19～21点 9 (22.5%)
22～24点 1 (7.8%)	—
平均：18.5点	平均：16.6点

この調査では、得点が多いほどバイアス度が高く性別（男性、女性）に関してステレオタイプな見方をする人であるといわれている。そして、16～18点のレンジを超えると、ステレオタイプ、またはその傾向の持ち主と判断される。

調査の結果、女子学生は、男子学生よりもジェンダー・バイアス度が高くステレオタイプであることが窺われた。女子の発達上の特徴は、低い自己評価、自己受容、強い自己嫌悪といわれ、自己に対する否定的評価・感情は社会からの性役割期待とその受容に密接に関連している。

2. 体育授業とジェンダー問題

1) 過去の体育授業で「女（男）の子に生まれて損をした」「女（男）の子と違う扱いを受けて悔しかった」体験

男子学生は、ほとんどが「男に生まれて損をしたと思ったことがない」「あまり感じたことがない」と記述していた。「損をした」「悔しかった」ことを強いて挙げれば、次のようである。

- ・マラソンの走行距離が女子より長いのが嫌だった。
- ・男子はよく怒られた。
- ・小学校の時うるさいのは男子、静かなのは女子とレッテルを貼られた。
- ・高校で男子には厳しく、女子にはやさしい。
- ・女の子のほうが内容が簡単に組まれている。
- ・女子は生理を理由に体育を休む。

一方、女子学生からは、以下のような回答が得られた。

- ・中学の時、水泳の授業で生理でプールに入れなかった時「校庭10周を走りなさい」と教師（女性教師）にいわれたこと。
- ・男子に男の方が上だと思う人がいて、見る時など見下された。
- ・体力が無い
- ・身体的に痛い思いをする事が多い

2) 同様に、「女（男）に生まれてよかった」という体験についても尋ねた。

男子学生からは…

- ・ひとり旅ができる。
- ・上に立つとき、男の子と決まっているので。
- ・男は力もあるし、運動能力も女の子より優れていると思うので男に生まれてよかった。
- ・すべてにおいて楽。
- ・セクハラがない。
- ・ハードなスポーツができる。
- ・数多くの種類のスポーツができる。
- ・頼りにされる。
- ・女性が当たり前のようにやることを男がやると誉められる。

- ・門限がない。
- ・生理がない。
- ・子どもを産まなくて良い。
- ・女性ほど外見にこだわらなくてもよい。

女子学生からは…,

- ・子どもを生まなければならない。
- ・マラソン大会の距離が短かった。
- ・家の中で「女の子なんだから家事の手伝いをしろ」と言われる時。
- ・体力仕事は男がやってくれる。
- ・水泳の授業でやりたくない時は「生理です」と言えば休めた。
- ・体育の授業でやることが楽。
- ・ハードな種目はやらなかった。

以上の記述にみられるように、学校文化の制度と慣習を学習した結果、女子にとっての「見え方」と男子にとっての「見え方」に共通性と差異の両方あることがわかる。

ほとんどの男子学生が、おしなべて、今まで「男性」であることによって「損」な思いをしたことがなく、「男性」であることを肯定的に受け止めている。記述から浮び上がる男子像は、男子自身が「体育・スポーツ」において体力や運動能力に優れ、上にたつのは男子で多種のスポーツ種目やハードなスポーツにチャレンジする事ができる姿として捉えていることである。対して、男子からみる女子像は体育・スポーツ授業で実践できる種目は少なく、体力もなく、簡単なプログラム内容が組み、教師も女子にやさしく、やることが楽で、女子も授業を休みたい時は「生理」を理由付けする、といった姿に映っているようである。

3) 中学校・高校の体育授業で行ったスポーツの種類

小学校教諭の関口⁽⁹⁴⁾は、「小学校の時、走るのはクラスで一番速かったのに、マラソン大会では男女別に分けられ、しかも女子は男子の半分の距離。高校では「家庭科」は女子のみ必修（土曜の午後、男子が帰宅してから女子だけ集められた授業。なぜなら、男子は受験勉強）、「体育」の授業では男子は剣道で先生が指導するが、その間、女子はたむろしておしゃべり。大学でも女子は水泳は免除であった」と語っている。関口の体験は特別なことではなく、今日でも類似した事例は多数存在する。1989年の「学習指導要領」改訂で家庭科の男女共修をはじめ、体育でも単位数とカリキュラム上の男女差が撤廃され、男女ともに武道・ダンスを選択することができるようになった。しかし、そのような理念は実現されているのだろうか。

以下に示した本調査の結果は、憂うべき現実を物語っている。

表3 中学校・高校で履修したスポーツ種目

男子学生の回答	女子学生の回答
(男女とも履修した) バスケットボール, バレーボール, テニス, ハンドボール, 器械運動, 陸上競技, 卓球, バドミントン, 水泳	(男女とも履修した) バスケットボール, バレーボール, テニス, ハンドボール, 器械運動, 陸上競技 (長距離走), 卓球, バドミントン, 水泳
(男子のみ履修した) サッカー, ラグビー, フライングディスク, ゴルフ, マラソン (長距離走), 柔道, 剣道	(女子のみ履修した) ダンス, リトミック

このように、男女共修で選択履修できるはずの武道・ダンスにおいても、男子は武道、女子はダンス（創作）・リトミックという画一的な割り振りが行われ、大半が男女別カリキュラムを行っていることが窺われる。また、女子が行ってきたスポーツ種目も少ない。これは、指導する体育教師が男女それぞれの生徒に対して異なる期待感を抱いていることの現れであるといえよう。こうして、体育授業での教師と生徒の関係や様々な経験の蓄積が、男子像や女子像を生徒たちにインプットしていくのである。

4) 指導を受けた体育教師の性別

中・高校時代の体育授業で指導を受けた教師の性別をみると、男女両方に指導を受けた学生は11名 (20.7%)、女性教師は2名 (3.7%)、中・高校とも男性教師と回答したのは40名 (75.5%) であった。受講生の男女数に偏りがあるが、出身高校をみると、男女共学出身者は32名 (60.4%)、男子校出身者は13名 (24.5%)、女子校出身者は8名 (15.1%) であった。このように共学や女子校が多いにも関わらず、指導する教師は男性が多数であり、女性教師は少ない。これは、中・高校における体育の女性教師数が少ないという実態に起因すると考えられ、カリキュラム上の男女差問題も報告⁽¹⁵⁾と一致している。

3. 学校における教師の態度・言葉と隠れたカリキュラム

1) 教師自身のジェンダー・バイアス

体育授業における教師の対応は、男子には厳しく、女子にはやさしい・甘いといわれる。他方、生徒の側においても、ジェンダーバイアスが強まるのは中学時代であり、生徒自身、男子を女子よりも「第一の存在」として優先させる慣習が学校に存在していることを認めている。さらに、女子よりも男子にその割合が多いという。また、男女に対する教師の対応の仕方に違いがあることも認めている。この調査⁽¹⁶⁾でも教師は女子より男子に発言の機会を多く与え、「男子に厳しく、女子に甘い」「女子なんだから～しなさい」「男子なんだから～しなさい」さらには「男子のくせに女子に負けていいのか」と言った発言が繰り返されていることが窺われる。

このような教師の発言は、男子に対して、女子の軽蔑を正当化する情緒的動機を与えると同時に、女子に対しても、「あなたは女の子だから、男の子と同じことができなくてもよい」というような「期待されない存在」としての評価をもたらし、不公平感を内面に生み出していく機会を与えることになる。女子自身もそうした現状を肯定的に受け入れてしまう習慣が身につく、やがて「その方が楽な生き方」となってステレオタイプを受容していくことになる。

このように、学校とカリキュラムが隠れたかたちで生徒の意識や行動をコントロールし、文化的な偏りや不平等を再生産していることは、ジェンダーの重大な問題として指摘されている。

W・Aアップルは⁽¹⁷⁾潜在的カリキュラムを「生徒たちがただ学校において毎日毎日何年もの間、制度的要求や日課にあわせて過ごしていくだけで受けている、一定の規範・価値・性向のひそかな教え込み」であるとしている。

この潜在的カリキュラムにいち早く関心を向けていたP・Wジャクソン⁽¹⁸⁾によれば、子どもが一定の行動や態度を身につけていくのは、教室での「集団生活 (crowds)」, 学習場面での「賞賛 (praise)」, 教師と生徒の間にある「権力 (power)」といった構造のなかであるという。このことは、大学教育においても同様であろう。たとえば、授業や学級経営、ゼミ等で教師が建前として男女平等を唱えていても、それが本音とは異なっている場合も多い。先日、成績優秀者を表彰する席で氏名を称呼する際、男性教師は全員「男子学生には～君」「女子学生は～さん」と呼び分けていたのに対し、女性教師は男子学生も女子学生も「～さん」と統一していたのが印象的であった。

もっとも、ジャクソンのいう潜在的カリキュラムは、もっと早い段階、すなわち保育所や幼稚園教育においても、社会化された子どもを生産していくと考えられる。

森は⁽¹⁹⁾幼稚園で25日間にわたるビデオ撮影を行った調査結果から、「認知的」なジェンダー構成として、男女児の制服（男はズボン、女はスカート）、スモック（男はブルー、女はピンク）、呼称（男＝くん、女＝さん）、出欠確認の順序（男が先）、整列の仕方（男が前、女がその後ろ）等々を挙げ、男女の区別が歴然としていたことを指摘している。子どもを頻繁に床に座らせる場面では、まず男女別に分けて座らせ、「お父さん座り（あぐら）」、「お母さん座り（正座）」、「赤ちゃん座り（足を前に投げ出す）」と何度も繰り返させる。間違っただけの子どもには強制的に直させる。男女別に分けた場所で椅子に腰掛ける場面では、男児が女児の場所に座っていると移動させる。しかし、「なぜ、そうする必要があるのか」についての説明は一切行われぬ。そして、行動を指示する場面では、名前ではなく「男の子、こっちおいで」「女の子ですからね」「女の子、取りに行くのよ」と語りかけ、性別カテゴリーの身体化を促進する。このように、「父」（男）、「母」（女）の日常イメージが身体操作を通じて、教師の目的達成のために「利用」されているのだという。まさに、ジャクソンの言う構造「権力」である。

この調査報告を某大学の幼児教育学科の学生に紹介したところ、教育実習や観察実習はまさにそのとおりの毎日であったという。しかし、ジェンダーの視点を学ぶまでは、「当たり前」あるいは

「そのように指導すべき」とさえ思っていたと語り、ことの「恐さ」を感じると感想文に記してきた。問題意識をもった視点が準備されることにより、従来意識されなかったことを別の角度から「見る」ことができるようになったのである。

2) 教科書とマスメディア

目に「見える」教科書、教材、授業内容に盛り込まれた知識についても、男性中心的な思想が反映されている。飯田は⁽²⁰⁾体育の教科書5冊を検討した結果、登場する人物は男性が優位であり、掲載されている挿絵や写真を分析した結果、男性は力強く活発な活動を前面に描き出しているのに対して、女性は小さく弱いタッチで描かれているという。また、男性のスポーツ種目としてアメリカンフットボール、女子はテニスが挙げられるが、後者は顔のない下半身だけの写真が掲載されている。顔のないこのアングルからは「見られる性」としての女性を読み取ることができると述べている。

筆者はさらに、現在、中学・高校で使用されている保健体育の教科書を、すべての出版社（11社）にわたって検討した。その結果、執筆者がすべて男性である教科書が6冊、女性執筆者が1人（残り20人は男性）であったものが4冊、女性が3人（残り30人は男性）であったものが1冊となっていた。なお、女性執筆者の大半は養護教諭であり、担当内容も「女の領域」とされる「母子保健・育児の内容」に終始していた。

教科書や教材をはじめ、教師間、教師一生徒間、生徒間などの学校内の人間関係には、強者と弱者、支配者と服従者のあいだの力学がさまざまな形で作用している。それは、男性優位・女性劣位を旨とするタテの権力関係を生み出し、家父長制イデオロギーを想起させる。

4. 反省的授業へ

デューイ⁽²¹⁾は、「言語による道具的思考」と「反省的思考」において意味を構成するのはコミュニケーション過程であり、学習の認知的過程は社会的過程として認知されているという。学生たちが生育過程でジェンダーの視点から「ものごと」を考察する機会に遭遇してこなかったことは、本研究に先立って十分予想されたことであった。そこで本実践では、毎回、筆者自作の資料（トピック、白書、新聞、写真、ジェンダー論文、VTR）等を使用して講義を行い、授業終了時にミニレポートを提出させるとともに、別途2回の課題レポート（「女性スポーツを阻害する要因」および「飯田論文を読んで」）を提出させた。このようなプロセスを意図的に経験させることにより、学生たちの既成の概念に揺さぶりをかけることを試みた。

こうして半期間を経過し、最終授業を迎えた。ここでは、授業評価に関する無記名のアンケート調査を実施した。当初、受講希望者の登録数は78名であったが、一度も出席しなかった学生が7名おり、しかも水曜日の1限（8：40～）であるため遅刻者や欠席者が次第に増え、最終まで受講したのは54名であった。17名は出席数の不足により単位が取得できなかった学生である。54名はほと

んど遅刻がなく最終授業まで受講した学生たちであった。筆者にとって初めての試みを、彼らはどの程度理解してくれたのだろうか。

1) 講義内容の理解度について (図1)。

ジェンダーの視点からみたスポーツ論の授業内容について、「大変よく理解できた」「大体理解できた」を合わせると47名(87.0%)に達した。「その他」欄に記した2名の学生は、「ジェンダーとはとても奥深いものだと言うことがこの授業を履修して強く感じたことでした。だから、理解できた・理解できなかったというのではなく、時間をもっとあればもっと自分の考え方とかも、持てたような気がします」、「知識として、身につけることができたが、自分の「物の見方」にギョッとさせられるようになった」と記述している。

2) 特にジェンダー・バイアスがかかっていたと回想される場所について (図2)

男女ともに、ジェンダー・バイアスがかかっていたと考えているのは「社会全体」が一番多く、次いで「学校」「家庭」の順となっていた。また、「その他」として、「田舎」と記入した者がいた。これは、自分の居住地を地域ととらえ、親の実家などを「田舎」とみているように思われる。ジェンダーの視点から日常を捉えると、「田舎」は風習や世間体といった性別役割にかかわる問題(思い込み)が多いのも事実である。

3) 「女らしさ」「男らしさ」の概念について (図3)

受講以前に抱いていた「女らしさ」「男らしさ」の固定意識(特性)は、受講後どのように変容したか、という問いである。受講後も「同じ考えかた」である学生はみられず、「思い込んでいるところがあった」とした学生が60%に達した。次いで、「今までと視点が変わった」(33.3%)、「とくに男性・女性と意識しなくなった」(11.1%)の順であった。「その他」が1名いたが、その学生も、「今までの考え方が180度変わったわけではないが“らしさ”という言葉に敏感になった」と記している。おしなべて、ジェンダーの視点から「男らしさ・女らしさ」について考える機会にはなっていたようである。また、ジェンダー・バイアスが高かった女子群は、自分の「思い込み」によるステレオタイプに気付いたようである。

4) 性別役割(男は仕事、女は家事・育児)について (図4)

「男は仕事、女は家事・育児」という従来の性別役割意識を引き続き肯定する男子学生2名を除き、男女学生の74.1%は、「家事・育児は両方でやるべき」と回答した。また、現時点で「まだわからない」とする者も14.8%いた。

1970年代後半から1980年代にかけて、女性の社会進出が活発になってきた。労働市場では女性の

地位が上昇し、特に若年層において男女の賃金格差が縮小した。このことによって、「男は仕事、女は家事」といった固定的な性別役割意識は弱まり、男女平等化に向かって社会が変容しつつあると言われる。しかし他方、学歴水準と性別役割意識には負の関連があり、主婦専業度の高さと性別役割意識には正の関連がみられるという²²。現在の「男女両性」意識のありようは労働市場側の誘因（女性の労働市場での処遇）や家庭の側の性別役割規範のあり方にかかっているため、まだ社会に出ていない学生の意識は流動的であると考えられる。本研究の調査においても、女子の場合、「まだ分からない」と答えた3名以外は、全員が「家事・育児は両性で」と答えている。しかしながら、特に青年期においては、女性自身が願う生き方と、社会が女性に期待するものとが大きく異なっている場合が多く、そこに性別役割をめぐる葛藤が生まれやすいのも確かである。

5) 男性や女性をみる視点の変化について（図5、図6）

この質問には、「今までと変わらない」とする男子4人を除いて、全員が「変わった」と回答している。具体的な変化については、男子の多くが「人間としてみるようになった」と答え、女子の多くは「個人として、人権の立場からみるようになった」と答えている。なお、男女とも第2位に「性別にとらわれるのではなく」が挙げられている。これは、「一人の人間、人格をもった個人として異性をみるようになった」とも解釈され、他の選択肢との区別が不明瞭であるため、学生の回答が割れたものと考えられる。設問がやや不適切であった感がある。

6) 講義内容、資料、ビデオ等の適切さについて（図7）

講義内容や教材・資料の適切さについては、全体で、「大変よかった」が26%、「大体よかった」が70.4%、であり、合わせると96%が適切であったと評価している。一方、あまり良くないとする男子2名は、ジェンダー・バイアスと思われる場所について、「家庭」と回答している。彼らは、「男らしさ・女らしさ」については「思い込んでいたところがあった」としながらも、男女への視点は変わらないと答え、性別役割については、「男は仕事、女は家事」を肯定する回答を寄せている。

7) 印象的な講義内容について（図8）

印象的な講義内容（自分の興味・関心を示した項目）について、複数回答を求めた。学生は、「性別役割について」、「男らしさ、女らしさとは」、「両性具有者（半陰陽）」、「近代オリンピック（女性の参加種目はどのように決められたか）」、「学校体育・教科書とカリキュラム」、「マスメディアとスポーツ」、「高橋マラソン・飯田論文を中心に」、「古代オリンピック（男性中心の競技）」、「ジェンダーとは、ジェンダー・バイアス、ジェンダー・フリー（なぜ、ジェンダーの視点が必要か）」の順に印象的であったと回答している。

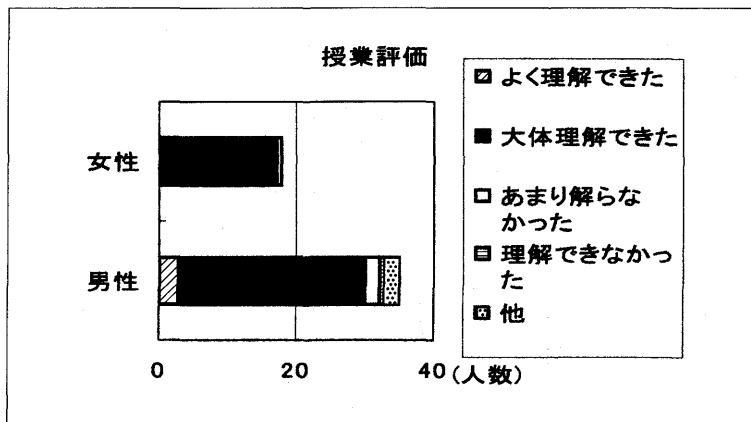


図1 授業評価

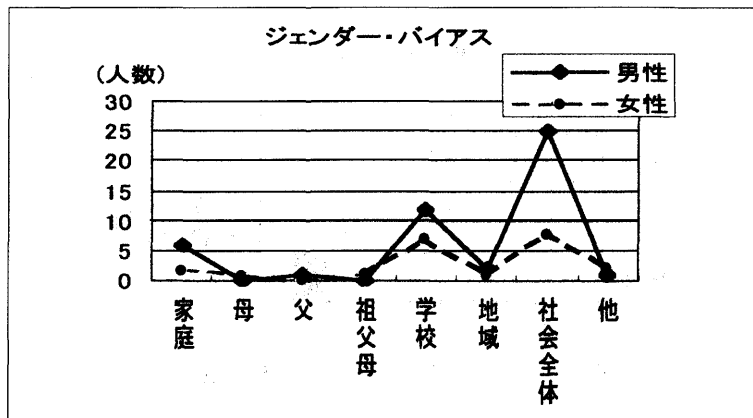


図2 ジェンダー・バイアス

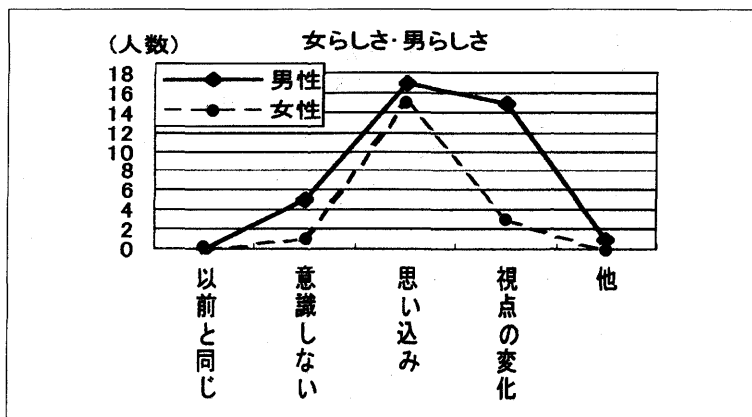


図3 女らしさ・男らしさ

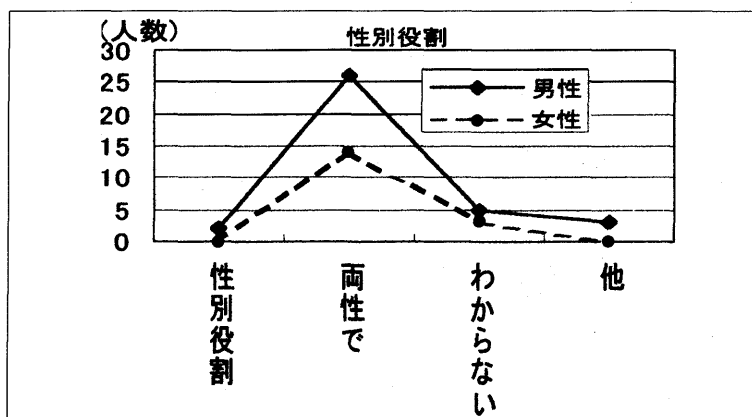


図4 性別役割

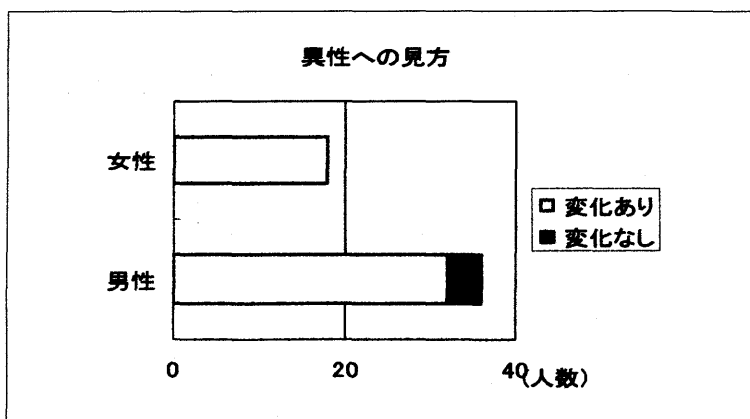


図5 異性への見方

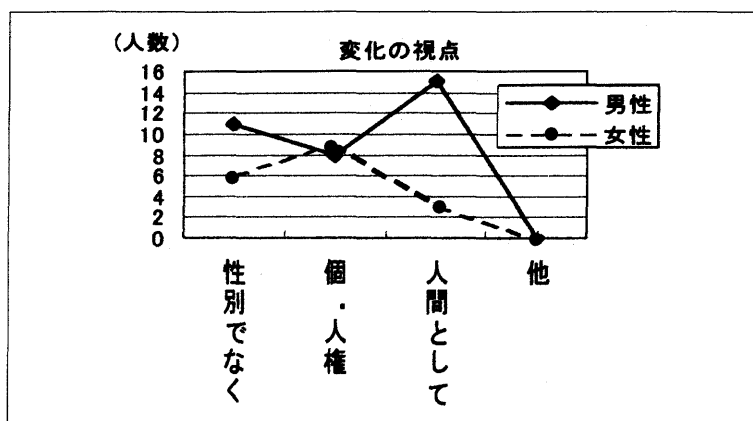


図6 変化の視点

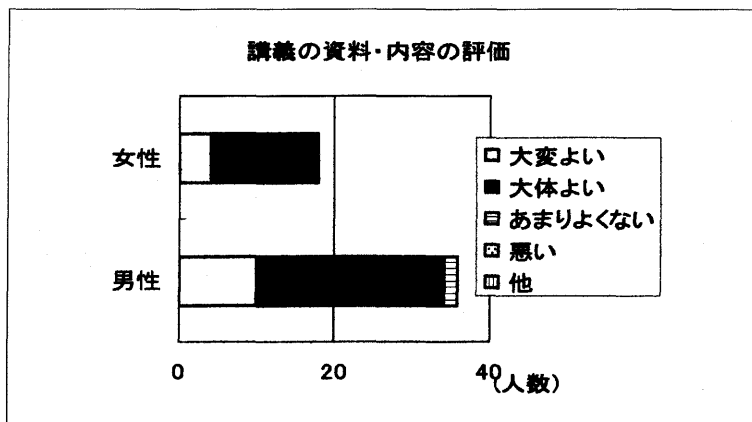


図7 講義の資料・内容の評価

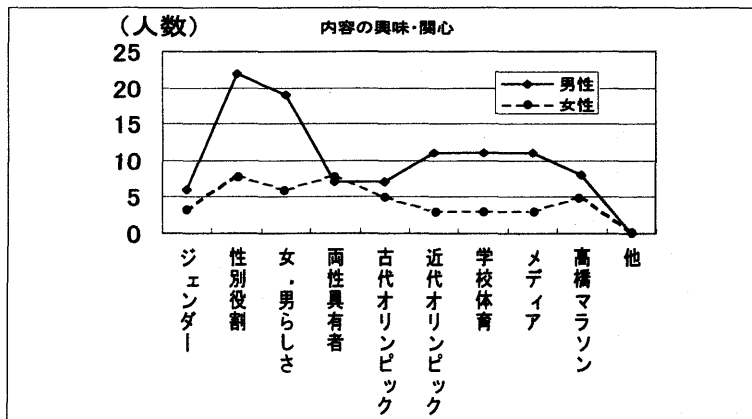


図8 内容の興味・関心

8) 学校体育での希望選択種目

「現在、学校体育で選択するとしたらどの種目を選択しますか」という質問には、男子の40.0%が「ダンス」、34.2%が「柔道」、25.7%が「剣道」と答えた。女子は、「ダンス」と「剣道」が各41.2%、「柔道」を希望した者が17.6%であった。男女公平で自由であることをタテマエとしながらも、実際には中学・高校時代に選択されない、あるいはそのチャンスさえも与えられない種目がここで多くの支持を集めていることは、きわめて興味深い。

5. ジェンダーの視点からみたマネージャー (自由記述)

最終授業においては、「ジェンダーの視点からみたマネージャーについて述べよ」というテーマで、受講生全員に自由記述をさせた。ほとんどの学生はマネージャーと聞くと、直ちに「女子」を連想

すると記述している。テーマは「マネージャー」と表記するのみで、意図的に「性別」はつけないかった。しかし、学生たちは見事なまでに、性別役割の延長線上にこの問題を位置づけていた。

ところが、現在行われているマネージャーの「仕事」の内容に言及するにつれ、その主要内容が「人の世話をすること」であり、それは「女は家事・育児」の発想に連なるものであることに気付いていく。さらには、その「仕事」の内容は、将来家庭をもったときの女性の在り方を予行演習してるようなもの、とまで言い切る。そして、「この仕事なら、女である必要はない。なぜ、男ではいけないのか?」、「この仕事は男でも女でもいいのでは?」という思いに辿りつくのである。遂には、「本来のマネージャーの仕事は何か?」、「マネジメントとは何か?」への問い直しへと至っている。これら一連のプロセスは、下図のように示すことができる。

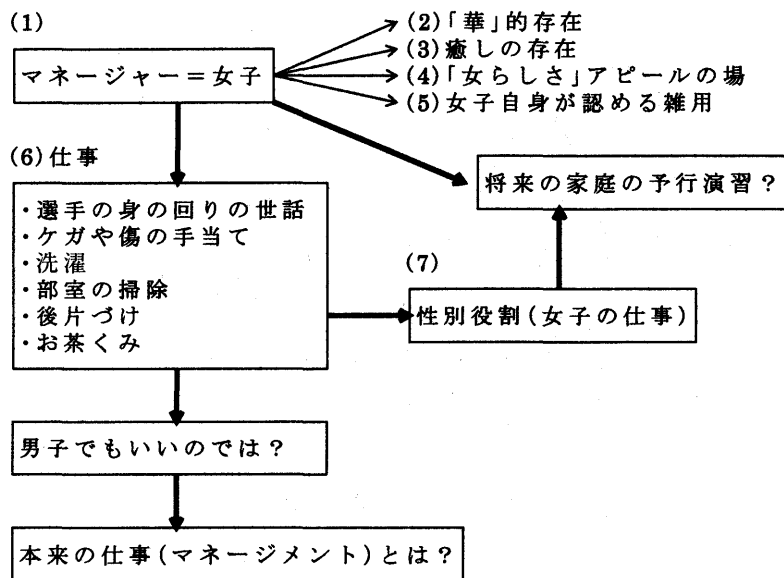


図9 「マネージャー観」の変容

以下、学生の記述を追ってみたい。

(1) マネージャー=女子という固定観念

- マネージャーと聞くと、「女子生徒」の任務であると思ってしまう。
- スポーツ部活動でマネージャーと聞くと、すぐ女性が雑用をしているイメージがある。
- マネージャーはイコール女子、献身的に男子部員に尽くすというイメージがある。
- マネージャーを勧誘するときも、必ずといってよいほど「女子」の言葉がついてくる。なぜ

「女子」がつくのかと考えると、「女は家事」という女性の性役割からくるものなのだと思う。その中には、「女のできることは雑用だ」という考えも含まれているのではないだろうか。だから、マネージャーの仕事を女性にやらせようとするのだろう。

(2) 女子マネージャーは「華」的存在

ほとんどのスポーツ系のサークルの先輩たちが「女子マネージャーになりませんか?」と言ってきた。その時、ついてきた言葉が「ただいだけでいいから。ちょっと、汗かいた時に背中とかふいてくれればいいから」といわれた。私達は男性から見て本当に“かざり”なんだなと思った。勿論、腹も立ったし、スポーツをしたかったので断ったが、女だからといって一緒にスポーツもできないのかなあと思われた。女子スポーツ部には男子マネージャーはいない。女の中に男が一人いるというような、女が男の上に立っているように見えるのがイヤなのだと思うと、まだ、ジェンダー・バイアスはしみついている。

(3) 女子マネージャーは癒しの存在

女子マネージャー（どの記述にも必ず女子という性別が付記されていた。つまり、マネージャーは女子という前提で語られている：筆者）という存在は、男所帯のスポーツ部活動における「癒し」だとしたら、こんな失礼な話はない。

(4) 女子マネージャーは「女らしさ」のアピールの場

私は「女子マネージャー」イコール「女の子らしさのアピールの場」と考えている。マネージャーらしく、記録をとったり、怪我の手当て、部屋の掃除など選手のために一生懸命になっているが、女らしさをアピールしているのだと思う。とくに、男ばかりの部活では女の子が「ちやほやされやすい」また、そういうことを望んでいる女性がいるからジェンダー・バイアスにかかっている社会になるのである。

(5) 女子マネージャー自身が認める性差と雑用

ドラマや漫画の影響で、「女子マネージャー」という役に憧れ希望する人が多い。また、好きな人がいる・男子に気に入られたいからという動機の人も多い。マネージャーに「女子」の言葉がついてくるのは、その中に「女ができるのは雑用だ」という考えも含まれているか

ら「マネージャーは女子に」やらせようとするのだろう。しかし、女子の方もそのことを自ら認めているようにマネージャーになって、雑用ばかりをたんたんとやっている。社会では「男女平等」といっているけれど、女性の方でも自ら性差を認めているのではないだろうか。

(6) マネージャーの仕事内容

- マネージャーが女性である必要は何もない。男子でもいいはずである。なぜ女子なのか。それはマネージャーの仕事内容にあると思う。
- 運動部のマネージャーの仕事と思えば浮かぶのは選手の怪我の手当て、休憩中の水汲み、部室の掃除、選手のユニホームの洗濯、雑用一般的に“女性的”と思われるものが多い。

(7) 仕事と性別役割（夫婦の関係）

● 私も高校時代野球部に所属していたが、入部当初はマネージャーがいなかったので1学年がその仕事をしていた。その内容は、お茶をつくり、ボールを磨き、掃除をし、選手が練習に集中できるように…といったものであった。よく先輩にからかわれて、「お前はいいお嫁さんになる」と言われたことが、印象として残っている。その時は、その言葉を何とも思わなかったが、今は、マネージャーという仕事が社会的につくられた「女らしさ」を表現する場として存在していたことを感じる。2年生になり、「女性」のマネージャーが入り、いつのまにか私達は雑用から離れていた。やってくれる「依存」する存在があったからだ。やる人がいなければ、自分のことは自分でやったのに、やらなくなってしまった自分がいた。私もふざけて「おまえはいい嫁さんになる」と言ってしまった。

● 「マネージャー」と聞けば「女子生徒」、「マネージャーの仕事は？」と聞けば「選手のユニフォームの洗濯等の雑用」が思い浮かぶ。しかしながら、「マネージャー」は「女子の雑用係」で繋がるのは何故か。男性でもマネージャーは務まる筈ではなからうか。「マネージャー」は「主婦の仕事」のようなものとらえるから悪いのである。選手は自分で汚したもののくらい自分で洗えば良いし、「マネージャー」をうまく利用しているに過ぎない。これは、家庭における夫婦関係を見事に反映している。主婦は夫の身の回りの世話をよくする男性優位の関係が選手とマネージャーの間にも生まれているのかもしれない。女性もすすんでマネージャーになろうとするのもどうだろうと考えてしまう。自分の生活すらちゃんとしていない人にマネージャーはつとまらない。すすんで男性に仕えようとする女性は、もしかしたらもっと「自分」を大切にしてもよいのかもしれない。「マネージャー」の仕事は、女性だけでな

くやろうとすれば男性にもできるのだから。

(8) 「マネージャーの仕事」：マネジメントとは

- 女子・男子に関係なく、本当のマネージャーのあり方をもう一度考えてみたいと思う。女子マネージャーの役割についての固定観念みたいなものをなくし、変えていく必要がある。それには、高校の保健体育の授業の時点で考えて見るのも良いし、もっと低学年からジェンダーの視点を知っていればかなり変わると思う。
- 一般常識で考えられているマネージャーの仕事をするのではなく、「選手と同じ立場」という視点（競技の知識をより身につけて、試合時や練習中に簡単な選手へのアドバイスや管理をして欲しい。なぜなら、選手は試合に集中しているのでシンプルなことを忘れがちだから）で部活のマネージャーをやってほしいと思う。

Ⅳ. 結 語

- 先日、テニスの試合をTVでみてみると、女性選手が映される度といつていいほど、胸や足などから映されていることに気が付きました。それに比べて、男性選手は顔や全身が映されるだけでした。“女”という言葉は否定的、また、弱いイメージばかりということが分かりました。友人と話していて気づいたことは「嫌」など、否定的な言葉の多くは“女”という漢字が使われたものが多く、「勇」などは“男”という文字が含まれていることが多いのです。そのことに気が付いた時は、残念な気持ちで一杯でした。文字という言葉をも明確にするものが男女のイメージを植えつけているのだと思ったのです。
- 最初の頃は“ジェンダー”という意味が分からなかった。「スポーツに関係しているもの」と思って受講した。しかし、授業をしているうちに“ジェンダー”とは自分達にとって身近にあり、ほとんどの人が知らないものだ分かった。授業を聞く度に「これもジェンダー内の問題なのか」と驚かされた。最終的には今までと違った視点、それから違う考え方をできるようになり、なおかつ、日常生活のなかで少しずつではあるが“ジェンダー”のことを考えることができるようになったのは自分にとってプラスになった

これらの記述は、学生の受講後の感想文である。感想文に代表されるように、多くの学生は、「ジェンダー」という言葉を聞いたことさえなかった。しかし、授業が進むにつれて、今まで気づかずに通り過ぎていたことや、考えてもみなかったことを、ジェンダーの視点に立ち、身近なところから見直し始めている。ジェンダーについて学ぶことを、「自分のなかにある思い込みに気づき、当たり前と思っていたことが当たり前でなくなる瞬間」と表現した学生もいる。従来の体育授業や日常生活において、男に生まれて損をしたことがなく、むしろ、男に生まれたことを肯定していた学生たちは、現代社会が今なお男性優位（男性中心主義）の社会であることを確認し、女性の生き方に差別と不自由さがあることを発見していった。

さらに、メディアをとおして気がつかなかった視点で目をとめ、疑問を抱き、男女がお互いに「男」「女」としてではなく、対等な人間、人格、個として平等な立場で人間関係を構築していかなければならないと考えつつある様子が、学生たちの記述の随所にみられるのである。われわれは、例えばスポーツに関して、何事かを「思っている」のではなく、メディア等の社会的な作用によって「思わされている」と言った方が正確かもしれない。メディアがもたらすスポーツの一面的な解釈、あるいは不当な解釈を、慎重に見極めねばならない時期にきているのではないだろうか。

最後に取り上げたマネージャーの問題においては、学生たちは、従来の思い込み・刷り込みによる女子役割と仕事との関係に意識を向けるようになり、その内容が性別役割そのものであることに気付いていった。「マネージャー＝女子」という図式が潜在する組織構造に疑問を投げかけ、性別を超えて本来のマネジメントとは何かを考え始めている。

ところで、これまで性別役割は、家庭における男と女（父母）の役割モデルが再生産されたり、学校文化の隠れたカリキュラムのなかでステレオタイプの教師による言葉・態度等が慣習として繰り返されたりして、男女をまなざす価値観や固定観念が伝承されることによって形成されるものであると考えられてきた。しかし、近年の論議においては、そのメカニズムを問い直す様々な主張も展開されている。

例えば江原⁽²³⁾は、「役割分業」があるのでなく、「夫婦」というジェンダー体制があるのだと指摘する。まず、「女」というカテゴリーと、「家事・育児」や「人の世話」を結びつけるパターン（「男」の場合には、分離するパターン）パターン、すなわち「ジェンダー秩序」と呼ばれるものがあって、それが各行為主体の実践によって、家族という「ジェンダー体制」において特定の形に産出されていると考えた方が、より適切であるという。

また、アンソニー・ギデンズ⁽²⁴⁾は、「社会システムは役割で構成されるのではなく、再生産される慣習で構成される。構造の二重性によって行為者と構造との間を結ぶ結合のポイント」とみなされなければならないのは、慣習であって役割ではない」と指摘する。

ところが、多木⁽²⁵⁾によれば、こうした「体制」や「慣習」を内包する文化は、女性スポーツの出現によって、大きな転換を余儀なくされたのだという。すなわち、「スポーツの概念が、男性の身

体を核にして構成されてきた政治的無意識を暴き、これまでスポーツが語られ、実施されてきた長いひとつの身体文化に終焉をもたらしたのだ」と指摘している。もちろん、「男性だけで理念化され、女性がたんなる補填であるような文化は、社会文化として欠陥がある」ことは疑う余地がなく、それを是正する使命をスポーツだけが負っているわけではない。重要なのは、組織におけるジェンダー構造が、スポーツ組織を含め権力関係によって特徴づけられ、これらの関係が様々なやり方でセクシュアリティを支配していること。そして、この権力関係が、組織のセクシュアリティという過程を通して維持され、強化され、競われるということに注意を向けることである。そのための具体的な手だてとして、アン・ホール⁽²⁰⁾は、「ジェンダー（年齢・階級・人権・民族・障害・セクシュアリティ）への関係論的アプローチ」を支持している。それは、支配者と従属者との不平等な関係を認識し、スポーツがこれらの関係の構築に一役買っていることを認めさせるアプローチである。

さて、以上のような識者の言説を前にして、本研究はきわめて限定的な事例を示したに過ぎないかもしれない。しかし、多くの研究者が提示する「問題を解決するための方法」を実行することに先立ち、まずもって、「問題の所在」が社会的に認識されなければならない。とりわけ、学生たちの身近な世界に「埋め込まれた」問題を掘り起こし、「再考すべき問題がそこにあること」を彼らに知らしめることが肝要である。本研究では、筆者が実際に行った授業実践を題材に、ジェンダーに関する固定観念の存在と、それが崩され、再構築されていくプロセスを追ってきた。授業実践を通して、学生たちはスポーツ問題をジェンダーの視点から見直ただけでなく、身近な友達、両親、学校教育、将来や社会全体のジェンダー・バイアスへの“気づき”と“揺れ”を体験しながら、自分の世界を拡大しようとしはじめた。

それにしても、スポーツ界に内在するジェンダー問題の研究は、ようやく緒についたばかりである。特に、ジェンダー・フリーな社会の実現に向けて、スポーツ教育が担う役割は大きい。そのためには、スポーツ教育を単なる知識の伝達や記録の競争にとどめるべきではないし、紋きり型の言説や思考回路に陥るべきでもない。様々なスポーツ事象に対して、ジェンダーの視点から、「なぜ」と問いかける姿勢と能力を学生たちに形成したいものである。

注

東京女性財団（1995）「ジェンダー・フリーな教育のために－女性問題研修プログラム 開発報告書」

このプログラムは欧米諸国を参考にして、日本での2年間にわたる調査研究結果から「ジェンダー・フリー（人々の意識や態度的側面を指す言葉）な教育を推進する」ために、教職を目指す学生や現教師のために手引書として開発されたものである。

参考文献

- (1) 『金子みすず』文芸別冊 第4版, 東京, 河出書房, 2001, p.8
- (2) 井谷恵子『体育カリキュラムにおける男女公平を検証する』体育科教育7月号, 大修館, 2001, p35
- (3) 小笠原悦子『ブライトン宣言』体育科教育5月号, 大修館, 2001, p72
- (4) NPO法人JWS『第1回アジア女性スポーツ会議報告書』2001, p7
- (5) ibid, (2), p.37
- (6) 来田享子/田原淳子『女性スポーツ, これまでの100年, これからの課題』体育科教育1月号, 大修館, 2001, p.33
- (7) 日本体育学会『一特集スポーツとジェンダー』体育の科学, vol.47-6, 杏林書院, 1997
- (8) 佐藤学『教育方法学』第6版, 東京, 岩波書店, 2000, p.77
- (9) 木村涼子『学校文化とジェンダー』第4版, 東京, 勁草書房, 2000
- (10) マイケル・W・アップル/長尾彰夫/池田寛編『学校文化への挑戦』東京, 東信堂, 1993
- (11) 竹内洋/徳岡秀雄編『教育現象の社会学』第5版, 京都, 世界思想社, 2000
- (12) 上野千鶴子編『キャンパス性差別事情』東京, 三省堂, 1997, p.30
- (13) 玉野井芳郎『人間におけるジェンダーの発見—ジェンダー・文字・身体—』東京, 新評論, 1986, p.29
- (14) 座談会『学校とジェンダー』子どもプラス vol.5, 雲母書房, 2000, p15
- (15) 井谷恵子/田原淳子/来田享子編『女性スポーツ白書』初版, 東京, 大修館, 2001, p.198
- (16) ibid. (9), pp97-98
- (17) ibid. (10), p.198
- (18) ibid, (10), p.198
- (19) ibid, (11), pp.137-141
- (20) 飯田貴子『スポーツにおけるジェンダー・バリアー—障害と抵抗の現実—』体育の科学 vol.47-6, 杏林書院, 1997, pp.427-428
- (21) ibid, (8), p.69
- (22) 盛山和夫編『日本の階層システム4 ジェンダー・市場・家族』東京, 東京大学出版, 2000, p.127
- (23) 江原由美子『ジェンダー秩序』東京, 勁草書房, 2001, p127
- (24) ibid, (23), p117
- (25) 多木浩二『スポーツを考える』東京, ちくま書房, 1995, p.160
- (26) アン・ホール著/飯田貴子/吉川康夫監訳『フェミニズム・スポーツ・身体』初版, 京都, 世界思想社, 2001, p178, 205
- (27) 伊東公雄/牟田和恵『ジェンダーで学ぶ社会学』第7版, 京都, 世界思想社, 2000
- (28) 池田勝/守能信次『スポーツの社会学』東京, 杏林書院, 1998
- (29) 原ひろ子/大沢麻里/丸山真人/山本泰『ジェンダー』相関社会科学2, 東京, 新世社, 1994
- (30) 亀田温子/館かほる『学校をジェンダー・フリーに』東京, 明石書店, 2000